俳句の革命はこうして起こった！

詩としての俳句

一碧楼と井泉水の自由律

要約・編集　吉田　野良

俳句の革命はこうして起こった！

詩としての俳句

一碧楼（いっぺきろう）と井泉水（せいせんすい）の自由律

要約・編集　吉田　野良

はじめに

荻原井泉水が「層雲」を創刊したのが明治四十四年四月、河東碧梧桐が「海紅」を創刊、中塚一碧楼がそれを手伝うのが大正四年三月であった。「層雲」と「海紅」という自由律俳句の二大雑誌が発行され、現在も人気のある尾崎放哉、種田山頭火の自由律が生まれている。

私は、井泉水の詩としての俳句に賛同するものであるが、定型であろうとなかろうと心を打つものはいいのである。その点からは、現在の定型俳句は遊戯に流れているものが多いと感じている。

そこで、原点復帰、自由律の精神に帰ってみたい。本当は、「自由律の教科書」が作りたかったのだが、現在の私の状況ではそれもできず、このような形で皆さんの参考に供することとなった。

後日、後世のために、自由律の教科書を作っておきたいとは思っているが、できるかどうか。

平成二十六年五月

古田野良（誠）著す

目　次

「一碧楼第二句集」大正九年一〇月　より　・・・　四
「井泉水句集」大正一四年九月　より　・・・　四九
「句作問答」大正七年五月　より　・・・　九二
『子規以後…詩としての俳句』大正七年五月　より　・・・　一一二

※すべて近代デジタルライブラリーにて公開されています。

一碧楼第二句集（いっぺきろうだいにくしゅう）

大正九年一〇月二六日発行
著者　中塚直三

大正元年の作

うすもの着てそなたの他人らしいこと

紫ばかり朝顔が咲く工場住まいよ

生まじめな夫人萩に椅子出して

掌がすべる白い火鉢よふるさとよ

酒知らぬ男に冬日黄いな森

霙れるそのうなじへメスを刺させい

少年は鶏卵を数えてしまって冬の蜂

鶏肉屋のむすめは風邪気味でランプ灯して

乳母は桶の海鼠を見てまた歩いた

浅草、二句

道から闇が流れ入り蜜柑酸っぱい

コートの裏ちらと緑なるひる鍋

大正二年の作

産婆うとうと火鉢に寄り二階明るい

親鳥まどろみ春の潮鳴りたうたうたう

海苔を烙つてる俺の脊の広がるおもひ

大正三年の作

海月取りいらいらと我家見る夜かな

繭買の親切に姐さんしんと坐りけり

若葉くぐる母子のもの池の水少くな

己が掌接吻ひつつ青年は接吻ひつつ草紅葉

日射しつつ我心爛れたり葱畑みつむ

小牛は何もなき冬田を眺めハタと走り止みたる

鉋屑の出る有様こそ面白し棟梁はこの朝識りぬ

日高まさりつつ我家包まんとす枯野

石切り夜の心に移らんとす蜜柑かな

額広い小母さんに氷柱光りつくるなし

君が手套は青くながながとつきぬ塀

※手套…手袋

灰作ることにわが焚く藁火かな

夜更くるほどに見し炭の木目かな

女愚なれば茸山の道の乾き

牡蠣売の西日に噬せて詮なしや

※詮なし…しかたがない

女ごころに藪道が赤う霙れる

大正四年の作

空広にみぞれ来し牡蠣を打つ
口どもる葱畑の広き中
顔小さき女なる寒の街なれ
煤を掃く床下の広さのまひる
くろちりめんひんやりすあかがねひばち
日照りつつ鴨打に港小さけれ　※鴨打…鴨狩り
障子が照る葱畑に帰り着きたれ
我家のまえの夕まぐれ蟲つかみたり　※夕まぐれ…夕方の薄暗いころ

葉鶏頭に洗う鯊串に今日足らじ

瓜もぐに荒浪の鳴り暮るるはや

葵立つや盆月に入りし夕嵐

昼顔に暴風となりし門鎖す

石だたみ踏み立つて木蓮赤し

柘榴一本の背戸春の雪積もりたり

※背戸…家の裏口

大正五年の作

枯野ありて馬のやさしさ

お前のことに汽車にのる湯豆腐うまし

冬帽ただしくかむりたる男さみしければ去れ

冬帽　著　し人ずんずん過ぎゆくわれすぎゆく

川大きく流れ宿屋のむすめ肩掛す

平凡な火鉢買いたくてあるく昼

部屋に持ち入りし野菊花うら

墓にまいりゆく笹草にぎはへり

はらはら霧のなかあうらてのひら

梨噛じり捨つ窓そとの広さ限りなし

蕎麦畑　白きばかり踊りすすまぬ

鯊縄四五鉢女房を持ち

盆の人々の裸なる藁屋根厚し

胡麻花咲きし盆の休み日の袖よ

樹の中の柳散る朝の家音よ

足もとの地の白き魂送る

家の間のひやづく夏娶りたり

人夫がしらよ樹のもとの昼顔咲ける

からだいたわる蓮苔みたり

蛇ころしたる空の青さの和み

鰺引らもどる広道ふめり

遊泳衣着し水に声出づ
をとこ仲たがいつつ苺の熟れし
苺畑の日に嗤せつ娶りたり
百日紅花咲き地のものの巌
男ばかりあるく葉柳の道のゆがみ
漁夫らいらいら地を踏める夕べあたたか
あさひばりなきひびく河床赤し
浅草の朝長し角店春日
網やぶれ讃岐の山の雪残り
暖き夕の別れの俥の揺るる

ひたぶるに機械場を出たき梅咲きぬ

※ひたぶる…ひたすら

老人よ小鳥よ東風吹く赤し

東風地を吹き馬は繋がれている

木瓜つぼみにぎはへり家を風吹く

黒い外套を着て君が泣き入つて辛夷の花

河水が流るる襟巻とれり

大正六年の作

霜が地に降りる堅気であるまいやつ

阪町ででくわしてしまって黒い襟巻をしとる

冬の日のお前が泣くそのように低い窓

冬の夜の我が持ちて人形の眼の動く

海鼠突の兄弟が家に戻って来てしまった

海鼠を採らんはるばる陽があがる

酢牡蠣のほのかなるひかりよ父よ

心踊る霜夜の　蕪　の雑な

理髪師霜夜の人体図よろこべき

処女なれつかつかと霜を踏み去る

埋火の一夜の名残の我れ

闇から来る人来る人この火鉢にて煙草をすひけり

酒を飲みわが綿入のたもと

赤土匂い夕ぐれとなれば女あるきたく

茸飯などを食いおそろし日過ぐ

両手さし伸べうす黒い炭を掴んだ

母よ葉の多き秋草の一束ね

霧の夜の船造りの大工布団に入り

あけぼのの横雲の冷ゆるものを去なし

酔えば秋の夜の板の間のおもしろく

己れ首太き秋夜の行く人と連るる

秋の昼赤子口を突出して何ぞ
牛を屠る朝々の庭の露見たり
葡萄を食い暗い一室を出でられず
桔梗咲けば牛のからだに触るる
露冷えのよろこび口籠りたり
漁夫が稼ぎのおもしろくなく草の花咲けり
花火あがる夜のよろこばしくへさきのほそし
秋風家吹けば百人の女もの食へり
夜をあのしみの船大工若く秋風吹けり
井涸れし我等が青い鶏頭

母よ巌を打つ浪のしぶきの秋
蠅を焼き笑ひ合へるこの家
こどもをひき据えまろき梨をとらする
稲むらへ追ひつめる者の黒髪
秋の崖急なれば男女むつみけり
子を産みこのかたの渋柿の木が二三本
泡盛に酔えばいちにんの肩先を突き
日覆を掛け小さき魚一つ一つを殺す

十八歳の工夫工事中感電して死ぬ、三句

若い者が死んだ涼しい日の日覆垂れ

からだ逞しき死骸単衣蔽われ
新らな葭簀真急に立て掛けられ
葉桜秋となり借家人嚇さるる
雑草の花咲き人の醜き
鰐かけの一縄沈め果てたり
涼しき昼の腹減りしまま家出づる
夏夕べ娘たちの行くうしろの広さ
人蒼ざめ一八の根を掘れり
逢はむ夜の茂草踏みあまりたり
日けぶる我だちが巌かげの夏

弁天祭の単もの着せかけらるる

仏壇の戸をあけさせて寝る幮をつらしめ

ある日はひとりで体操をして蠅が淋しい

水を貰いにゆく夜に入りてからだ暖き

父よいづこもかげろひてあり桐の青葉も

葭切目の前に鳴きさびしまるるや

毛虫落ちる今日も土を踏みものを食う

春潮ずんずん引いてゆく我が家に居らむ

酔っぱらっては春夜の仏の花をつかみ

燕鳴く日の中からだ冷え来るや

胡葱一束ね萎びたる手にとらず
春の夜のつめたい腕垂れたり
夕暮れの鰆を買い占める問屋
魚じまある朝の庭木眺めやりたり
疾風の春の樹の下の人
誰でもいい君の潮干連れの一人の俺か
雀子の育ちゆくひくい煙突
松露のすひもののその夜の人らなぐさまず
胡葱一うねにつくり年とる女
水ぬるむ不漁の手濡らさずをる

黒い風呂敷に何もかも包み梅林

あいまい宿屋の千枚漬とそのほか

蕪の葉をつかみ風こころよき

女の児真白いマント来て近より来る

善い坊さんが来て冬の海蒼き

雪ふる夜の障子多けれ逝くや

貧しきものの高つきの羽子なる外れず

手毬かがる麻の葉のほかはなき母よ

大正七年の作

飽かず暮らすなかなか炭とりぞ
短日の黒いさかなの中にても
帆布の匂う父と子との短日
赤い落葉の一日の背をまるめて人よ
港一ぱい舟の戻る冬の赤い襟した
水鳥しろく丘裾を急ぎ廻った
かの夜の埋火も彼の女も闇
埋火かきたてて赤い慰めのなし
一日の疲れの足袋を脱ぎ揃えた揃う
葱畑のたのしき酒に酔うて眠らん

曼珠沙華つき挿す水の少なし

弟 息子は芒白い野で芒ばかり見た

私が見湛える芒の根の湿りです

上人の御襟巻の軽い捧げたし

逐はれ越ゆる夕月の山の草の実

曼珠沙華咲くへ来た男の顔のまるみ

我れ逃げず沙地の二三本曼珠沙華

曼珠沙華腐れる人の往来す

河上の児らが曼珠沙華立ち腐れしぞ

月夜の山々のけだものよ毛を持ちし

※沙地…一面の砂地

柿を頒つやさしうて舟板の白らけ

梨を食うているやさしい悪者でした

わが風邪気味の夜の美しき電車轢くもののなし

秋の山が根のこも水を渉りて父子

粟畑の道のくねりよ忘れず来たり

身のありがたき石垣の草のうす紅葉する

曇天の秋の人々よ銭持ちし

風邪気味のこの夜のちいさき鮓のひかり

風邪心地の真昼の垂穂の稲の水のべ

子を背負うた者の咽喉見せて稲が色づいた

棗を食いこぼし事もなう手を切ろうとするも

棗を盛る一つの鉢を得んほどの願ひ

茹栗うまいうまい流産した顔を見せとる

家々の人の声す栗の穂が垂れた

我が手甲のかたい一日の薄紅葉見た

冬来る髪に油して人を苦しめ

柘榴酸っぱい私の前の牛が動く

露の朝の牛の頭を見い老爺も見い

悼、一句

星匂う幾夜か窓を閉じたり

秋の鳥の声を隅々に聞いては菜切包丁錆びる

つきしろの舟子舟板の匂ひ

粟畑の雨の日いたづらなる山の根

となりの男牛となりの青柿の渋柿

黒塀よ低き秋の日の善人来る

小窓よ秋の日のわが両手汚れた

糸取女背を見せてばかり日没

荷馬車が唐辛子畑へ突入る事もなく馬の口とった

萩が秋そめる川向うできつい労働だ

秋日の汽車へ乗込む若い地主さんよづんづん

あかみさんカンナの花が何ともなく家へはいった

これほどの事を嬉しがる麻服着とる

一人の若い医師の何とはなく汗ばみ苦しめり

夫人よ炎天の坂下でどきまぎしてよろしい

網シャツ着て死んだ鱸ばかり見た

かくし男が眠るであろう盆の高潮があげてくる

一冊の日本歴史よ樹の下の真夏よ

真夏の鏡の前の何ぞ我れ戯るる

夜涼のてのひらの乾きて夫婦

蚊遣の草のしめりを知りたりしふたり

商人若々しく雑草がかたまり咲いた

家の空の三つ星が三つのさまのうれしく

白らけ凪いだこの海から鱶を釣って毎日

青い桐の木の下でじっとして悩んでいろ

簇を折るしたしみ真向きに坐る

漁夫ら裸が苦しい夕ぐれの何かと話す

裸苦しき桐の葉の破れ二三枚ならず

或夜の饗がはっきりして夏夜の男女なり

夫婦は赤子があってぼんやりと暮らす瓜を作った

牛の角がぐっと曲っていて麦が熟れ過ぎた

麦が熟れ過ぎた一枚の畑を忘れず死ぬる
夏の林のうちに斬りつけん何物もなし
早朝うすものを着たこの者に逆らい
この朝うすものを着て仏壇の前にひさしき
河原ひろびろ愚物が汗を垂らした
うすもの哀しき身のほどのこの夜が明けた
単衣を着たしんじつ蜥夫が水を恐れ
秣の一車のかげでささやいて夏の日が来る
雨ふりそそぐ地よ看守汗ばみし
暖き日ぐれの艶なる者消え戻らざるべし

十

好かれて　筍　茹る間を待たされまして

大海夏となる首細き者や首太き者ら

篠懸の葉が茂って人々が蒼ざめて躍って

蛍がころころ死ぬる昼で古いお前が帯をしめて

この池が潰れる夏のはやり唄の一くさりも知っていろ

もの食う何ぞただによろこばし我夏に入る

君来るよろこびの蠅叩の柄短い

胴長の犬がさみしき菜の花が咲けり

若者からだ痛き日ぐれの蕨食ひけり

日ぐれの鰆網の烈しき身を躍らせて網子

夜の冷ゆる寄居虫も砂も

汐干のことの　憤り飯を食ひけり

種まきおくれたるやさしく蒔かん

花見の出かけの赤い面を持ち捧げたり

花見の鼻高面をかぶりおかしき坂を上りて

息子の無理が通る桑の木の芽が立った

菜種が咲きかけた夜明方の貧民

春一夜明くる捕へし者のてのひら

惚れた桑買さん黒いお膳について

桑買さんに惚れる渓の音あらあら

針魚のあはれことごとく並び揃ひたり
針魚の口の尖りを笑はむとしたり
春一番が吹くことも家の内に吹かれたり
桃一枝を活けてこのよるの布団薄うし
女労働者枯草の匂ひ幾群となる
洗礼式のすべての窓をあけ窓の木瓜赤し
まじめに犬のからだを見てうららかな
此木がきっと芽立ってあなたが私にひきずられる
深川めしを食ふ春日のわが肋覚ゆる
きさらぎ晴天の人の慈しみをうくる

凍る日の一人の戯奴が煙草持ちたり

寒の雑穀倉でしたたか言ひ責められる

寒鰡を食ひあらあらしく言へどこの伯父

硝子戸よ烈寒のものを食ひ散らし

師走の一つの島の砂浜

鰒を洗ふ水の桶を胸もと

赤子が死んだこの家の飯と湯豆腐

霜夜の物音きこゆ手を伸べる

水べにはげしき働きの足袋穿けり

煮やっこを食ふお前のうしろがずっとあいとる

あんこ鍋のいちにんを捕へたり
正月吉日の菓子をいただきて打伏せる
串柿ちぎり食ひぞんざいに言ひます
船長船を離れていて派手な首巻しとる
松納めともなれば前の山々

大正八年の作

わが首巻のわが匂ひの雨の夜
柿の核を見るまことなるひとときや

家々ぎつしりつまつて少女は手套の　快く

娘たちが初冬の会堂の建物の古び

庭の枯草のほのかなる赤みを見せて我が家

君に追ひすがる道の枯草の匂ひ

夫婦が日日の磯の巌の師走

わが行く冬の野の小鳥よ翔ちて小鳥よ

われらが島端は浪のしぶきの短日

林檎を噛ぢり肉体を　恣　にあらはす

わが短日の林檎置き　輝　きて

娘は短日のいぶせき家々を見て過ぎんとした

初冬低い塀のうちに働け

夫人はこどもを持たないで冬の街の賑はひを見た

雨夜の柿を手にす笑ひたり

死鯊も藻の屑もぬくみ

豪雨となりし鯊縄を沈め

冬めく夜の何事もなき夜の菊の花

蟲取りが僅かの蟲をとり山々の連なり

鍛冶屋が藪の秋誰とても往来した

鍛冶屋は火花を散らし秋の夜の家に住みたり

※いぶせき…むさくるしい

鍛冶屋が昼休みの青空から何も降らない

秋の鳥に鳴かれる家の井戸を覗いた

大根畑を戻る顔を濡らす雨の明るさ

月夜ひもじくもの食ひつつしめり

雨夜の巻たばこのうまさ女は乳を包んで

鯊釣の帰りの鯊が少なうて洲崎へ灯が入った

酔うては蕎麦刈に手を出したくて来る

鯊一連を一籠とす籠

紫苑の一つのテーブルへ来ては去ぬるはや　紫苑…キク科の多年草

畑の土が夜となる牡牛青柿

わが霧にぬるるおもてをあげる

霧の夜の白首とばかり思へないで地を踏む

※白首…襟におしろいを濃くぬりたてた女

月夜のうすい着物をきて家を離れずにいる

刈粟残らずをしまつて倉の白い

犬が犬の匂ひの露けき　※露けし…露にぬれてしっとりしている

星空となる一つの四つ手の獲もの

煤降る中明方の彼等が四つ手

月夜のわがそびら君方に見らるる

※そびら…背中　君方…君たち

秋の日の日中の野の石のぬくみ

藁屋根が腐る柘榴を食って居る
黒蝦逃した水中何もなし
残暑の家の人々の筧なり　　※筧…竹や木の樋
残暑の野を広う見渡し工夫は帰れなかった
巌が根の深し栗実りて垂るる
送り火よ燃え盛り地上に明る
墓参の道の月となりし手あつし
墓参戻りしうすものの姿見らるるぞ
栗の穂垂れ老人かうべ垂るる
紅蓮家をめぐり咲き男女なり

丘々の低いふるさとの夏の夜の流行唄なる

盆提灯を繕ふわが膝に抱く

盆提灯二つ吊らんとする三つ吊らんとするおろかさ

盆が来る家うちの日射しに坐すか

栗の花の地に落ちみだれ光りなし

牧夫が肥えるあはれ栗の花の匂ひ

梅雨入りの降りの鶏の首ほそぼそし

空の白栄ゆる少女が快

白栄ゆる海のかくれ巌のかくれた

森から風の吹く桑の実食ふか

梅雨の寒き夜の笑ひひびきてや

梅雨の朝の竈の火焚く者のしばし

形見の帷子取り出される畳へおかず　帷子…夏に着るひとえの着物

此夏我家を出たくない何の心なる焼茄子

麦の刈跡の広々し白飯食むか

さばかり麦仕舞の馬をいたはる者や　※さばかり…たいへん

麦扱きの満月となりし家そと　※麦扱き…麦の穂をこき落とすこと

音なく立ちし桐の木のむらさきの花

我らの桐の木二本の離れて咲いたむらさき

麦畑の実入りを見て立去る者どもの徑

単衣着の母とあらむ朝の窓なり

麦秋の河のうねりうねり入る海や

夏めく日の鴉ゆく空のしばし

浅草の夜の酒をのみ水をのみて夏めく

行く春の朝日さす飲む水

薔薇の花を見る私の蝕める葉を見る

夏めく家そとに流れゆく水

山風の吹く蕗畑を出でで吹かるるや

母子が夜の大海の夏めき暗し

朝日夏めく空船の船頭も妻も

さし潮の我が舟の浮きし夏めき音す　※さし潮…満潮

桝網の桝形のおろかしく春の大雨

人群るる中苗木の一束をほどきあたまあがらず

春の夜更の一室に水をのみてこぼさず

春昼わが職長の髪垂れさがりて額

朧夜君とあれば小石拾ひあげたりし

夜の菜の花の匂ひ立つ君を帰さじ

春の日のくれの横浪をうける今ぞ帰らむ

一島の麦の穂立ちの巌々のたたずまひ

辛夷が下の枯笹ぞ土の粘りぞ

春の広野の風吹き立てば我厨に戻る

風吹いて蛙をつかむ者らである

老が笑ふ春の磯畑の石の白く

雛の日の軒垂れて我家の雛あらず

雀が巣を立ってしまふ屋根の空なり

巣立子飛び去る我らが井の浅し

すみれをとらむ道の直きおどろき

牛の大きく牛小屋の春の山べ

針魚縄一流しの引汐の巌出づ

雀の裸子がとられる真急なる梯子

燕がなく夜のとかうかうべを垂るる　※とかう…とかく

桜の幹太く牛の角のまがり

蟹をとる二人が冬の入海のさざなみ　※入海…入江

一人は首巻を巻いて死蟹を手にす

冬の昼寝をする軻夫が死蟹の一笊

海鼠の一桶を抱へ帰らんとす渚の波

梅が咲く海鼠の桶の水の多少

二本の梅が咲く家の貯えの藁嵩

ペラペラの首巻我が巻けば風邪で死なない

ふるさとの餅のまるきよ風邪気味の夜の幾度手にす

埠頭を没す潮の芥の春を戻った

小娘なれ手套を袂にす

我らが舟の寒凪を帰りつきしぞ戸口

家を出でては早春の海べの男女に接す

正月のマントの襟を立て憎まれてあれよ

懐炉を買はんにもこの森道を来た

彼の女は俥にて去る鴉は浮いて流れる

早春殊に山ふもとのわれらがやしろ

工女ら休む日とてなく早春の山の辺の湿った

埋火一夜の河音の荒立ち明けんとす

春の夕霧立つ二つの橋を二つ渡った

井泉水句集

大正一四年九月二〇日発行

著者　荻原　井泉水

大正九年の作

根岸雪景

美しき朝日昇る昇るはやまぶしきばかり
別荘前の日影冬田におちくぼめり
枯芝暖く毬がころがりてとまらず
夕空しろじろ凍れる月がまろくあり　※まろい…円い・丸い
田水の月のささなみ凍らんとして

＊

地上の雪はかの岬より晴れかかり

雪は菜の青さ蔽ひきるばかりにて晴れ
雪山どっと朝日なだれて来り
人人晴れし雪ふみにじりにじり朝
工場の煙はみな海になびき雪霙れ
子供ら雪景色の手すりにしかとつかまり

＊

子雲雀鳴くか麦のかげ消えのこる雪か
雨霙るる時のはや夕日にて藁家
疲れつ動きいし時計とまりたり深夜

霊泉賦

南伊豆行の汽船にて

船の窓から寒い雨の東京が離れる

錨を巻く音の強い雨となり

船ましぐらに今は嵐のただ中を走る

船のきしみ人悶え転ぶせんすべなし

苦しむ人等明け白む船房の小さな窓

浪打ちかかる窓に顔あてて海の黎明

下田の朝

嵐のデッキを踏み堪えて船夫等うたふ朝

嵐の船が鳴らす笛に港の山答へ

嵐晴れて薄日さす山の枯れならび

命あやうく着いた船のはしけの小銭

蓮台寺温泉

早春の窓明け放ち温泉宿の机

節分の豆朝の温泉のふちにもこぼれ

温泉宿より寺が見ゆ寺の椿見ゆ

目白二匹となり番い飛んで子の鵜に寄らず　※鵜…とりもち

炭焼く煙打ち靡け山雨煙り来る

雨が晴れたらし朝の人の争う声聞こえ

温泉の村ちかし早春の流せせらぎ
旅の僧よ早春の鈴を振る曇り

大浦まで

馬車馬に馬糞のレールがどこまでも続いて
海苔が地べたに干してある夕空暮れず
浪音影をはらむ月となりゐたり
港の月夜は雲に風少しある

下賀茂温泉

降るより消ゆる雪の外湯の菜畑
籠の鳥鳴く暁方の雨戸一枚明けて

寝る前の温泉に行く村人が暗い提灯

白浜村付近

眼を放つはるかにはるかに浪立てり

枯草の風ふらふらと菫よな

水車がまはるまろまろと山は枯れて

是こそ七島さびしや水平の一線

海風燃えあほる火を囲みて笑ふ

天城越

身の物残りなく身につけ寒い宿を出る

氷踏む馬に道をゆづりて旅人

月褪せてある高嶺へ道続けり

路ははるかなる一念の水音や

行くほどにはや空にそぎたつ白雪ばかり

青空身にちかき風の峠にかかり

今は谷谷陽の隈もなき昼となり

峠茶屋の婆が云ふ寒き日の伸びた事

雪をとかす日の山の層層と聳え　※層層…幾重にも重なっているさま

雪に走る澤水の橋の一つ家

毛深き馬を曳いてゆく馬子の首巻

北伊豆へ入る

雪解ぬかる近道と知りて踏み入る

氷柱をつたふ水の岩根の青草

枯草山の陽の色いつしか夕陽となり

水車をまはす美しい水の暮れゆくころ

湯が島温泉

瀬音の中の枯木に沿うて温泉宿か

温泉なれ湧き溢れ水なれたぎり流れ

梅干の酸き宿の朝はればれとあり

月いまは凍てて青き日の空にあり

金港風景

梅が白くちりばめられた空の日曜
梅林へ往き来あるかんごく裏の春
籠の雲雀を影らす雲の過ぐる青空
鷗きろきろ鳴きつつ水に漁るものなし
鷗群れ飛び悩ましく水濁りたり
桟橋の春雨におり立ち外国の水夫だち
噴水けぶりつつ雨籠めし木の芽の春
雀よ我はわが朝の深呼吸をする
佳い雨夜中に降って佳い朝の雀等

泣きたい顔の女の嬰児よ笑ふか

太鼓打つ打つ蛙鳴く鳴く病人に

騎手の赤き青きが淋しく負けたる馬の顔

馬が馬に勝たんとする土の弾力

麦の穂に競馬果てたる赤き日が落つる

草が股に痒く虫採る少女ら

花の京都へ

伊勢、内宮

神前の花ぞ雨風に鳴りゆらぐは

神楽の笛のさむざむと雨降る桜

ぞっこん濡れし雨着をぬぎ神のおまへ

花の雨の神苑の鶏よ長き尾を垂れ

神の花散る御手洗川はあふれ

鳥羽

宿のよき風呂の事まづ妻に云うなり

濡れし袖など宿の小き火鉢にかはき

鉄槌の音に音に朝日昇り急ぐなり

軻夫ら浪を看る岡の強い風の桜

奈良

酔人等花茶屋の猿に物言うて

馬酔木にも人の埃の春はさびしぞ

餌がほしき鹿の顔の円き眼

春が逝く花の群集に押され苦しむ

東山めぐり

松の御寺に峯の桜が光り降るかや

観音の花につどへる衆生酒酌む

舞台の花に都の昼の日はまうへ

花屑の畳の銭を掃くなり

噴水しぶくや花に来てほてる顔

※花屑…散り落ちた桜の花びら

花に疲れし脚投げて御所の青草

都 踊 を観に

篝煽る風の夜の花の散りやすし

都の春が散るぞ散るぞ祇園をあるく

嵐山

高嶺の花よ急流の岩に棹さし

花を見きはめし舟の矢の如くくだるか

ここのみに残れる花の虚空蔵菩薩

北山あたり

行く人をとどむる女に花は残り少くな

道のべにして御陵のさくら繚乱

春も終りに椿咲く古き御墓や

妻よ日傘に旅の日強うなりたり歩む

寶樹山荘滞留

岡山にて

既に夏は澄む大空の光の鳥

若芽葉となり旅人笛に吹きゆく

川水暮れのこる学生等の唄が流るる

小豆島、淵崎

島島の眺めよろしきここの島の神

鳶舞ふや花に触れ山の松に触れ

学校に行く麦の穂にとどかぬ小さい子達

日はまうへに鹽田夫らの影が燃えきる

汗が鹽となる鹽田かせぎの夏の痩せやう

げんげ摘みに子と出でし母の黒いかうもり

淵崎、寶樹山荘

巣に近く来て夕空を仰ぎをり小鳥

雲雀の中に雀鳴く一つ家はある

だんだん畑の上の上までの麦の夕日

戻った雀風呂の煙のけぶたくもあるか

葉っぱおもたく睡たくなった此木

山鴉鳴くよ木の芽の雨しゃんしゃん

山鳩を聞く

山鳩の声妻に教えて山の住居

話もなくて居る日の妻よ山鳩が啼く

夕焼かんがりと果樹のあり

※かんがり…ほんのりより明るく、こんがりほど熟くない

鶯きいて立つ夕焼を顔に感ずる

日がまだある山の麦畑の話しごえ

その実たわわに枝垂れたる木の軽い鳥

山荘病中

雲雀明るく病みてある床を鳴きめぐり

光を愛しみ物濯ぐ妻よ木の芽の光

果樹つつましく影を曳く夕月はあり

汽船の笛ふるへ鳴る青き夜の障子

ひばりの夢に穂麦の月みどり

鶏叫べども夜は動かざる夜のおびえ

餘島にて

漁船うつくしく磨く舸夫らのいつくしみ

人住まぬ家につつじに草伸ぶる
鶯の山よりの水平はまろし

祭の日

雨ざうざうと夜はとく明けし祭の太鼓
山の嵐にはためく神の幟仰がる
太鼓打ち打ち祭の雨を打ち晴らせり
山の祭の馳走に逢ひて旅にあり
こんじきに熟れ重たくて落ちたり木の実

遍路を詠ふ

海鳥ひろひろと鳴くぞ遍路は海を越え

つばくろのお遍路さんの南国言葉

遍路行く方麦の穂は光りつづけり

仏を信ず麦の穂の青きしんじつ

遍路とぼとぼと蛙の池に列をうつして

お遍路宿の灯よ雲雀安けく鳴きをはり

寒霞渓にて

空を指す木ぞ岩の天邊より生ひたち　（老杉洞）

岩に据えて瓢すわりよき山の頂　（四望頂）

遍路の杖にこちこちと鳴りて岩やま

独りの遍路に鶯の近く鳴き寄り　（石門の路）

若葉の光に疲れおり御仏は遠し

雉子鳴くお札所の山陰にて暮れ早きぞ　（石門洞）

若葉の風に仏の灯またたけり消えざり

いたく渇くと遍路もともに茶をくみて　（枕流亭）

遍路笠をぬぐ仏のみどりあかるし

山荘に戻りて

木木が雫す梅はびっしり実を持てり

雨に打ちのめさるる麦の雲雀ら声なし

山を洗ふ雨青うここに滝なす

大雨霽れて水音ひびく空高し

栗林公園にて

水鳥水をついばみ石に鳴きける
若葉の風に流れつつ鳴ける水の鳥
お庭の隅には竹さらさらと厠蔽うて
藤の匂ひよ家を離れて遠くも来つる
旅も終のたんぽぽの毛がさびしくて妻は

伊豆、走湯権現

神のつつじ若葉に燃えうつるばかり
雨宿り久しく神のきざはしにて
若葉のゆふだちが茶釜に洩るぞよおばばよ

麦埃

山は淋しく塑かれし麦のあからみてあれば

ひとり鍬の音やめたれば音もなきかな

麦はたく力増したることし此子よ

葬出した家のあからあからと積む麦

家中麦埃の初七日の仏事

麦埃にくさみする赤子抱きありく

麦はたく蝶々打たれじと翻へり

熟れ麦尖り折れ伏し陽強し

＊

古き家を載せた大地に臼を響かす

おのが杵の音聞いて耳遠い婆よ

空を吹き落つる風のかたまりの草むら

雲の焔 焼け崩れ落ちし山黒し

＊

月が出る山の家に手をつないだ木

空を歩む朗朗と月ひとり

夜の奏楽

夏の木立の闇は濃くあまし奏楽　（日比谷公園にて）

音楽ただよふ葉を葉をふるはして青き木

青葉と人と夜はめぐる行進の曲

音楽沸きたつ地の空には星を釣れり

噴水ささやく水に音楽遠し

木立あふるる楽の音に夜は広くあり

ここに楽を聴く夜の睡る草敷けり

海近き郊外

青き光浪だちて既に丈も立たず

畑物の中夕べの路の歩むに直し

草花よろし我庭となりの庭

海が月に明るくて淋し寝ねまくす

戸を立つる時昇る月にして涼しき限り

畑物やうやく涼しくなり牛の声する

一つ家ふるさしたしさ栗が穂を垂れ

東北の秋

福　島

火の山遠く旅の青木雨空

濁流かさみ秋暑く照りまさるなり

旅人我を夕陽に鳴くは　鶯　よ

夕空のふかさ地より立つ山山

夕焼の唄うたふ里の小川よ

蔦が茂るひそかな街の十字架

薄羽織また身につけ夜を露けく戻る

囚人機を織る音の朝より暑し

飯坂と鯖野

星星雲に日の炎冷ゆるより産まれ

旗の汗拭く手拭の一夜の温泉の香

※露けく…露にぬれてしっとりしている

葵に日は濃くて影深き庫裡はある
汗しとどに探ね得し古き墓の是れ
旧き跡語りつ僧が湯をさまさるる
足袋埃り易く路草にはまだ露がある
旅にて淋し氷水のがらすの匙音

松島

けふの我等の舟を共にし風をよろしみ
島島かけて流るる風に舟を流せり
島に舟寄せ松の根の秋草を手折る
かげり深く虫しげき土よ舟を登れば

※しとど…びっしょり

蜩鳴ける島はうしほに埋もるばかり
かなかな鳴き伝へて島に島続き
一つの島は潮のおもてに御堂を捧げ
灯籠のいのち闇は濃き水に燃ゆるぞ
水に咲く花の蓮と灯籠流がすや
灯籠流るるあはれ消えずて潮に引かるる
灯籠大方波に消え浪の音かな

石巻

川がうつす星空の海に注ぐなり
旅に居れば天の川さやかなり頭上

星座更けて傾けば山の灯冴ゆる
風はやし海には闇ののたうつ
星空親しく露台の軽き椅子

平泉（中尊寺）

白蓮咲けり仏法を呪ふ火の中に咲けり
白蓮咲けり堂は亡びし大地の荘厳

鳴子

今は暮れきりし山はある灯はある
家並まばらに温泉の香立ちそふ草の匂ひ
温泉の山禿げて氷屋の赤い提灯

瀬見

夏草深く汽車が行く遠し湯治の裸

流されつつ泳ぐ児の丈が立つところ

泉を汲みに人人続く夕べとはなり

水音の景色淙淙と暮れすすむなり

※淙淙…水が音を立てて淀みなく流れるさま

草むらの虫のなか虫飼へる草家

山寺（立石寺）

雨に立つ木木根まで濡れしづかなり

鐘鳴りわたり仏を遶る樹樹合掌す

仰げば杉のたかさの虚空雨落つ
お山宵供養に売らるる桔梗も咲いて
婆が売る桔梗も線香も雨にぬれて
お休み石に秋風捧げあり捧げ行く
供養の裸灯秋雨の中に消えざる
夕蝉すずしく夜念仏の人が登り来

津山

闇に睡る草のなか踏み迷ふなり
身をかばふ傘の小さく夜の雨黒し
夜の虹白く病める月が落つる

赤湯

子供ら犬泳ぎする沼の蓴菜

箱舟嬉しく裸の女の子男の子

暑い日股までさして沼に釣る児よ

看護しつつ

幾年ぶりに握る母の手よいまはの

蚊帳のうち看とるひとりの親と子なるよ

氷を砕く音のするどく夜は更くる

ほともあらはに病む母見るも別れか

灯光刻む母の老いたる顔の陰影

病人睡りくわうくわうと澄める我が灯
看とり疲れの淋しき寝姿の我妻にして
芙蓉が凋み病人に事なくて今日も
看護の夜の更けて出る赤き月ありし
看護の灯更けてべっとりと庭草
いのち淋しく虫が奏づる夜の旋律

＊

病む母やうやく梨の一片に口動かされ
けふも日は照る病人のための濯ぎ物
虫の音澄む夜の病人脈の正しき事

星更けし下黒き家家つらなれり
看とり明かせし朝は晴れ末咲の朝顔
庭に一つの虫の音となりいよよ鳴き澄む
看護のひまにまどろみて長き夢なりし
団扇手にして更けて看護服はぬがず

＊

母や見舞はる秋のくだ物の甘し我もたべて
病人に拝ます住き月の深くさし入り
身を起こしをる病人を囲み名月の夜
月に供ふるくだ物の　堆き月影

月夜の記憶、其他

地蔵の庇浅くくまなし野の月

岩の月光なだるる谿は影深し

月光流るる流るるなかに小舟を放つ

病後をいでて木犀の秋に打たるる

子供よく遊ばせて我汗ふきたり

葛飾吟行

柴又

冬日するどく葱のうね深く影れり

瓦焼く火に蓋して寒き川風

川に添うて路はあり草は枯れてあり

国府の台と真間

柿茶屋の赤い毛糸に皆腰おろす

仏の池が陽を湛へ冬の草萌え

枯草の上の冬日にひろげし新聞

空は円く地は平らにして田の冬

中山

一羽の鳥に夕空はれいろうと寂し

夕焼つよく海までの冬田

途中

青空澄んだまま暮れる細い煙突
子供よ小川の青き冬空せせらぐ
枯草の小徑疑はず急ぐ犬かな

房州の冬

小湊まで

海は青し土は黒し旅人よ百姓よ
ぬくき日移り家陰のむぎ畑
諸畑あたたかく海光溢れをる

除隊兵を乗せて駈ける田舎馬車の喇叭

枯草に鳴く虫の空は青く冷え

夕日すべり易き崖路に馬車の痩せ馬

トンネルの口とぼしき西日さし入れり

旅人枯草に平らなる夕日を藉けり

天津まで

暮れのこる空のいろ満ちきりし潮川

明星かかり地を耕す人より暮るる

大なる星一つ澄み旅の空かな

浪音暮れて遙かの艪ごえ明かなるや

急げば足にばさばさと浪が暮れかかる

清澄の道

落葉鳴るはればれと寺へいそぐなり

山深く来て海が閃く海のかがやき

山に消さるる海をかへりみ山に入るなり

落葉に憩ふ遠ければ御寺さやか見ゆ

鶏の声声家が見えて山に山はあり

俵を背なに憩ふ少女よ青空仰ぎ

清澄寺

はるばる来り此のここの御仏の前かな

木の葉身に降る御仏の前去りがたし

闇にお蝋のおののける御仏拝む

上人をおもふ枯木に光しづかなり

御堂より冬の句もほぐれゆく山山

塔はなくて銀杏黄に仏前にそびゆ

小鳥あそぶ御堂の前の冬日は広し

斧の痕すすけ昔より燃ゆる竈の火

木の葉が澄ます山の井浅くて冬

ひび薬売が声かくる家まばらある

仁右衛門島

寒い日暮れて島の渡まだある

夕日褪せたる青白き巌を這ふ虫か

島の水仙を嗅ぐ冬の匂あまし

水仙のかしら重たく雨となるべし

人遠く来て此島の水仙を折る

曇しづかに潮満ちて暮るる島の家

風明りして暮れきらぬ島人の顔

島は一つ家と蔬菜畑の冬

加茂川

馬車に独り海風を強く揺らるる

こども等手をつないだ中を日暮の馬が通る

闇に白く泡を噛む馬の口か

句作問答

大正七年五月一日発行

荻原井泉水述

俳句とは一体どういうものでしょうか。
多くの人の説などを聞くと、ますます不安に思われますが……

それは「俳句というもの」を自分の中に発見しないで、外から観察しようとするから不安になるのです。つまり、俳句の用を知らないで、俳句の体を知ろうとするからです。

例えば、胃の悪い人が胃を癒すには、先ず胃とはどんなものか、それを研究しなければならない、と考えて、解剖書や生理書を読んで、胃の構造、組織などをいくら調べたとても自分の胃病の助けにはならないのみか、益々神経的に悪くしてしまうでしょう。解剖生理など外的に観察する研究は他人の胃を直す医者の仕事なので、自分の胃を良くしようとする病人の仕事ではないでしょう。

一体、胃とはどんなものか、という事を考えなくとも、食物が甘く味わわれ、消化が快く行われれば、それで足りている。胃の体如何ということは念頭になくて、胃の用が完全に働く、これが健全な状態です。

俳句もそれと同じで、本当に健康な句を作る人は、俳句の体ということは忘れている、それでこそ良い句もできる。初めて句を作る人に向って、俳句は十七字のものだとか、俳句は季題によるものだとかいう風に、俳句の体から説明してかかるのはよくない。あれは縁日のヤシが、蝋細工の人体模型で胃とはこういうものだなどと説明しながら、群衆を納得させて薬を売るのと同じです。

体を知るよりも、用を悟るのが肝心です。体について研究するのは俳句専門家に任せておきなさい。めいめいが実際に句作する上では、ただ俳句の用を活かしさえすればいいのです。

それが俳句というものを外から観察しないで、俳句を自分の中に発見するという事です。
俳句を外に観ようとするから人々の説を聞けば聞くほど不安になる。俳句を自分の中に見出せば、実際に句作を進めて行けば行く程、ますます信念を深くして行くことになります。

それならば俳句の用とは何ですか。

俳句の用は、最も単純にして完全なる創作的表現にあります。創作的表現とは、自分の心に触れたものを自分の命の中に取り入れることです。
「あら海や佐渡によこたふ天の川」という芭蕉の句を見ると、芭蕉の心に触れた秋の夜の大きく冴えた自然が、そのままこの言葉に焼きつけられて芭蕉の静かに寂しい命と共に今日まで生きていることを知ります。それは、この言葉が単純で且つ完全であるために、永久に又普遍的に伝わり得たのですが、それより大切なことは、俳句というものが単純でそのままに完全であるために、専門家の詩人でなくとも、誰でもこれを作り得られるという事です。たとえ芭蕉のような大詩人の心持ちと浅深の差はあろうとも、同じように句を作るという創作的表現の喜びを味わい得ることです。
それ故、俳句というものは小説や戯曲を味わうように他人の作を読んだだけでは決して本当の味わいは解らない、自分が作るという其の事に俳句の真の味わいがあるのです。俳句の体を研究するよりも、俳句の用を知ることが肝要だと云うのも、その点から了解されましょう。

上に話した胃の比喩で云えば、創作的表現は一種の精神的消化作用とも見られます。胃は栄養のために食物を取って消化する、消化というのは外界のものを変じて内部のものとする意味です。

野菜や肉類が融けて自分の血となり肉となるように、自分以外にあるものを自分の中に織り込み自分の中に生かす作用です。それと同じように、俳句で云う創作的表現の場合に、食物に当たるものは自然です。自然界は普通に客観界といわれていますが、単に客観として存在している自然は、自分と物理化学的の関係はあるけれども、精神生活的の交渉はない。その客観に自分の主観が働くに及んで、初めてそれが自分の心にうつる。その客観に対して愛を感じるならば、それを長く眺めていたいと思う心が起きる。美しい花に対した心持ちの如きがそれです。この心持ちが進むと、その客観を自分の中に取り入れ自分の所有にしようという要求が起こるに違いない。花を摘み取るという心理がそれです。

しかし、その花が萎んでしまえばそれきりで、完全な所有にはならない。完全な所有は主観の力に依る外はないのです。即ち主観の力が更に強く注ぎかかる、主観に依ってその物の姿を新しく創造してしまう、これが即ち創作的表現です。そこに咲いている花から、その花の句を作るという心の作用が之です。

花は客観であるが、それが句になる時には自分の主観に依って新しい生命が生まれる、そうして自分に依って創造せられた句の形で永久に残る。それは完全に自分のもので、萎むこともない、散ることもない。この創作的表現の過程は、上に話した野菜や肉類が融けて自分の血となり自分の中に織り込まれる作用と同じで、一種の精神的消化であるのです。

創作的表現は自然の写生にあるのですか。

「写生」という言葉は、俳句に於いては誤り易く思われます。自然を研究することは、忠実な観察から初めなければならず、その観察が描写となる、即ち表現となるという過程を「写生」という事は敢て不都合ではありませんが、もともと「写生」という言葉が絵画の術語であるために、とかく写生というと、物の輪郭を写しただけ、外在的に並べただけというものになり易く、ここに「写生」という言葉の弊害があります。単に外在的に並べただけでは絵画を文学に翻訳したものにすぎません。

云うまでもなく、俳句は一つの詩でなければならないので、絵画の翻訳では駄目なのです。すなわち、物の輪郭を写しただけでは詩にならない、その物の内性を捉えることが肝要なのです。そこに於いて初めて創作的の表現と云われるのですが、「写生」という言葉はここまで深い意味を持っていないように思われます。

一体、「写生」という言葉は子規が言い初めたのですが、子規は俳句に客観的ということを尊び主観的という事を排した、その主意と関連しているのです。けれども、子規が云う「主観的」「客観的」ということは正当な用い方ではありません。子規はむしろ「客観的」という代りに自然といい、「主観的」という代りに概念というべき所なのです。俳句は自然を旨とし、概念的作法を排斥しなければならない事は勿論です。

しかし、正当な意味で、主観的ということは決して悪い事ではなく、上にも話したように、客観の当体に、自己の強い主観が働きかけて、そこに創作的表現が完成される、精神的消化が行われて、それが自分のものとなるのです。主観の燃焼の足りない、単なる客観描写には、

創作として何等の価値もないのです。
今日、子規の流れを汲んでいるという人々は此の事に気が付かずに、写生万能主義を唱えていますが、それらの作品は、ただ目で捉えただけのもので、作者の心の火で溶かされたものではないのです。改めて云うまでもなく、この心の火に浄められない、ただ、目で捉えただけの写生句に創作的表現の意味のある訳はありません。

自然の美を詠うだけでは足りませんか。

「美」というのは自然の一要素ですが、美よりも真というものの方が、一層中核的の要素であります。例えば、一匹の蛾が灯のそばに来てハタハタやっている、その羽根の彩りが灯の色に透けている、その美しさという事を見たよりも、灯の誘惑に打ち勝つことができないで、身をもだえているその哀れな小さな命のどうにもできない真という事を見た方が、一層、自然をよく見たものと云うべきでしょう。
「美」というものは、とかく物を外面的に傍観的の冷やかさを以て見るだけで、自然のごく上っ面の模様に過ぎないものです。外面的でなく内面的に、傍観的の冷やかさでなく、抱擁的の愛を以て見なければ、本当の自然を解することはできません。この自然のほんとうの姿を感じた心持を私たちは真実と名付けています。自然の美というような浅い所にとどまらないで、自然の真実に向って踏み込みたいと思うのです。
それならば、「美」と「真実」とは両立しないものか、というに、そうでもないのです。真

実の内性が美の外観をもっていることは沢山あります。但し、美の外観をもっているものが、必ずしも真実の内性を具えているとは限らないのです。且つ、美の外観に欺かれて真実の内性のないものに愛好を持つ事が習性となれば、今度は真実のあるものに対して感受性、反応性を鈍くすることになるのです。これが句作の上で脱しがたい邪道の素因となりますから、大いに注意を要すべき所はここです。

上で話した、胃と食物の比喩で云うならば、滋養と美味ということは必ずしも両立しないことではない、滋養のある食物で美味のものは沢山ある、但し、美味のもの凡てが滋養であるとは云われない。且つ、美味なものの愛好に飽満すれば、その事が今度は滋養のあるものをも消化することのできない病気の元となりやすいのです。

元来、食物というものは、舌や胃に甘楽を与えるためのものでない、身体の栄養に具えるためのものであると同じに、自然は私たちの精神的生活の栄養となるべきものです。そのために私たちは俳句の創作をするのです。ただ俳句に詠って面白い、というような浅い甘楽にとどまってはいけないのです。されば、私たちは常に自然の美を詠うということよりも自然の真実を求めるという心をもって俳句に向いたいのです。

いわゆる、俳句趣味という事はいけないのですか。

俳句に「俳句趣味」というものは、初めから分離すべからざるもののように考えられてはいますが、これは俳句に対する一種の既成観念であって、正しい批評を待たねばならぬ事で

す。

一体、「趣味」というものは美感の一つであります。自然の美を求めるよりもむしろ真実を求めなければならぬ、という事から出発すれば、趣味なるものを尊重する理由はありません。すべて美を詠うということは、物を外面的に傍観的に見るような弊を生じるという事を上にお話ししましたが、趣味というものはこの外面的な観察に一種の標準を与えたものです。

例えば、山辺赤人の作に「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき」という歌がある。これは、作者が妻恋う鹿の声を聞いて、しみじみと秋の悲しさを感じた、その心持でありますから、美感を詠ったというよりも、むしろ真実を詠ったものです。

ところが、この歌が名高くなり、また山中の鹿などを実際見たこともない人が机の上で想像すると、紅葉の錦を織った峡に毛色のいい鹿のいる景色が非常に美しいものに感じられる。ちょうど絵でも眺めるように、単にそれを美しいものと見る、これが外面的な観察でありますが、更にこの癖が進むと、紅葉に鹿というものが、両々よく調和している、ここに趣味があるというように考えられる。で、梅に鶯、松に鶴という如く、紅葉に鹿を取り合せればいい歌ができる、佳い句ができるという風になる。

また、鹿というものを歌や俳句に作るには紅葉の頃、すなわち秋の季に於いてこれを詠ずべきものである、夏の鹿や冬の鹿は趣味がないという風に決めてしまう。また、歌や俳句に於いては単に「鹿」といっただけで秋の季と解すべきものである、そう解することに趣味がある、即ち「窓の灯を山へな見せそ鹿の声」（蕪村）という句は、秋の夜の趣きを詠じたものとして之を解することによって味がある、という風に特殊の見方を定めてしまうことになる。

また、赤人の歌から鹿の声は悲しいものという事に決定して、鹿の句を作るならば秋の悲

しさの出るように作るのが趣味がある、という風に教えてしまう。こういう事が、いわゆる「俳句趣味」なるものの内実なのです。これは物の身から、感じ方に対する一つの約束でありまして、鹿というものは秋季のものと定めよう、鹿の姿は悲しい感じと定めようと、約束したまでの事であります。そうしてこの約束を奉じる人々が、この約束に従って句を作り、この約束に従って趣味があると喜んでいるだけに過ぎないのです。

一体、鹿の声は、それを聞く人の心持ち心持ちに依って、即ちその人の主観によってどう感じるか知れない、悲しいものと断定してしまうのはウソでありましょう。たとえ古の偉い歌人がそう感じたからとて、後世の人は皆、その通り感じなさい、というのは不都合でであります。

今の俳人達がこの約束を強いられて、それを不都合と思われないのは、自分の主観の新鮮の感じが麻痺しているためです。重ねて申しますと、俳句趣味というものは物事に対して、これはこう見ることにしようという一種の約束を作り、これはこういう風に感じるものだという一種の因襲を是認して、その中で句を作るという事なのです。

つまり、俳句趣味という色眼鏡を作って、自然を覗き、これは美しい、これは面白いと興じている訳なのです。自然の真実、自分の主観に映った自然の内性を表現しようろいう心持ちから見れば、即ち真の創作という心持ちから見れば、俳句趣味などを尊重している事はまことに馬鹿らしい事です。真面目な心持ちから見れば、俳句趣味に依って句作することは一つの遊戯にすぎないのです。遊戯は芸術を見なすことができません。

芸術ということはどう定義すべきでしょうか。

芸術という事を定義したなら、難しくなりますが、古い有名な言葉に「芸術は長し、人生は短し」という事があります。人生の短く過ぎやすいという事の悲しみを知るものは、どうかして自分の生を永久にしたいという考えを起こすでしょう。

人生という風に大きく考えずに、今この一瞬間の心持ちにしても、この現在の感情をこのまま長く持っていたいと願ったとしても、心はそれからそれへと移って、現在の感情は時の流れに消されてしまうでしょう。然し、この一瞬間の感情をそのまま言葉に表現しておいたならば、即ち詩の形に焼き付けておいたならば、自分の記憶の存する限り、その詩句を想起する時には、その瞬間の感情がまざまざと蘇るに違いありません。このようにして、その感情を時の流れに押し流されずに保存することができる。そうしてその表現した詩句に真実がこもっているならば、それはその作者の死後までも永久に残ることができる。人生の命は短くとも芸術の命は長いという意味はこれであります。

それと共に、「人生は狭く芸術は広し」という事も云えるでしょう。私たちが或いは悲しいと感じ、又は喜びを感じる、その感情は自分一人だけの事ですが、それを言葉に表現して発表すれば、それと同じ感情を抱く他の人々の心に響き、そこに共鳴を起こす、悲しいのは自分一人の悲しみではなくなる。この同感、共鳴には世間的に貴賤上下の差別というものがない、その詩句に真実がこもっているならば、人という人の胸に響き渡ることができましょう。

自分の命が自分一人の肉体の中に限られないで、非常に広い波動を持ちうる事になるのです。芸術ほど人生を広くするものはありません。ロシヤ人やドイツ人の生活と私たちの生活

とは非常にへだたったものですが、かの国の芸術に接すると、まことに親しい人としみじみ話すような心持ちを感じるではありませんか。つまり、人生の短くして狭いという淋しさ、その淋しさに堪えない所から芸術というものが出生する。そうして人生を長く広くすることが芸術の目的であるのです。

それ故に、芸術には一種の淋しさ又一種の喜びとの色が附随しているものです。俳句はまことに小さな詩ではありますが、いやしくも、俳句として詩壇に存在の理由を持つ以上は、どこまでも芸術としての立場を失ってはいけません。私たちは、俳句は芸術でなければならない、という事を堅く主張します。そうして世間の俳句――「俳句趣味」などということを尊重している俳句を、全く遊戯的なものとして軽蔑しています。

俳句は十七字に依らなくてともよいものですか。

少しも差支えありません。十七字ということは一つの因襲に過ぎないのです。歴史的に俳句のはじめを調べますと、連歌というものがあったのです。これは五七五七七（三十一文字）の和歌を上の句（十七文字）と下の句（十四文字）とを別々に分けて、二人で作る、素より当座の興で、遊戯的のものだったのですが、ともかく、こうした連歌というものがあり、この連歌の上の句だけ即ち五七五の十七字を独立させて作ったものを連歌の俳諧といったのです。

また、十七字十四字十七字十四字と錯綜して作り続けて行く連句というものがあり、この

連句の一番初めの十七字を発句（連歌の発端の句の意味）と称した、この発句が連句から独立してただ十七字だけで作られるようになったものが今日の俳句の初めなのです。で、もともと十七字というのは和歌の一部分から来ているので、俳句の発生当時では俳句の上に随分、和歌の影響というものが多く認められたのです。

その後、俳句が真に和歌から独立するために、第一に和歌的な物の見方を離れて、自由な観察を扱ったという事、第二に、和歌的な雅語古語にのみ拘泥せず、俗語をも自由に取り入れたという事、などが着々と実行せられ、そこに俳句という特殊の詩形の意識がだんだん鮮やかになって来たのでありますが、十七字という事だけは、やはり和歌の一半たる形式ということに甘んじてそれより更に自由な調子に出ることが出来るという事に思い至らなかったのです。

もっとも俳句に於いて十七字を破るという事が全然不可能と信じられたのではなく、芭蕉も「夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて」などいう句を作り、もっと後に至って蕪村が「立去ること一里眉毛に秋の峰さむし」などいう長い句を作っていますが、俳句がだんだん世間的に流行して一般の人から盛んに作られるようになると共に、十七字以外の自由な形は一般の人には喜ばれなかったと見えて、やはり十七字という型で流行することになったのです。

一体、一般の人は型というものを好む、一つの型がないと頼りなく思う、又句を作る上でも、型があると作り易い、ある着想を言葉に現そうとする場合に先ず五字になる言葉を探し出して、そこに置く、次に七字になりそうな言葉を探し出すという風に、丁度、穴のある所へ物をはめて行けばいいので、これでうまくはまったという手心で理解し易い、そのため一般の人にはとかく、型というものが喜ばれる。当今流行している俳句に十七字の型が尊ばれ

るのもこの訳なのです。

しかし、こうした作法は前に話した通り、ある約束の中で巧みをめぐらすというやり口で、智巧の働きに過ぎないのです。このように言葉の表現の上で智巧を働かす方を技巧と申します。純粋な芸術の立場からすれば、技巧は排斥すべきものです。

俳句と散文との区別はどこにありますか。

十七字というような型を離れて、自由な表現をすると、散文と詩（俳句）との差別がなくなりはしまいかという不審は多くの人の懐いている所ですが、その心配は無用です。十七字という型は破っても散文にならないだけの用意があれば、立派に俳句としての詩になります。

そよかぜの梢に来て鳴ける鳥のその言葉　　鳳車

これは五四五三五の二十二字になってますが、散文ではありません。散文なら

微風わたる梢に来て鳴きをる鳥の妙なる声、如何なる言をか語るらむ

とでも云うべきでしょう。「微風の梢」という叙法は散文としてよりも、もっと緊張した詩の叙法です。「その言葉」ととめたのは、散文のあとを省略したのではないので、「鳥のその

言葉」に聞き入った感情をそのまま投げ出したのです。

で、正しく云えば、「鳥の妙なる声、如何なる言をか語らむ」というような、頭をかしげて考察している心持ちとも違うのです。「その言葉、おお其の自然の言葉よ」と感嘆した、その心のゆらぎを捉えたのです。原句「その」という語も注意すべきです。

この心のゆらぎは散文ではどうしても写す事ができない、散文にすると、固定的な且つ説明的なものになってしまいます。ともかく、原句は散文ではありません。

ところで、もしこれを十七字という型にはめて表わしたらどうかというに――この作者の感情の内容はこれだけの文字より一字も減じることはできない。もし、強いて十七字に約めようとすれば、作者のいきいきとした心持ちが傷められます。試みに「微風に梢の鳥の言葉かな」とすれば十七字になります。十七字の型にはめて作ることは「こしらえる」という上から云えば雑作はないのですが、原句と比較してご覧なさい。全く死んだものになるではありませんか。

第一に「梢の鳥」というものが固定的で軽快な鳥の姿が生きてこない。「微風に」も何か感じの説明を促すように聞こえて堅くなる。そうして「言葉かな」が鳥が説法をし人間が聴聞しているような仰々しさになる。大体に、一語一語にわざとらしい重みがついて、自然の呼吸そのままのふっくりした味わいがなくなる。例えば、鉢に活けた生け花のようなもので、この枝をこう、この枝をこうと撓めて、きめ込んだ形になる。床の間の飾りにはよかろうが、野に生きている花の自然な姿は傷められてしまいます。十七字の俳句は生け花の趣味です。かたちの趣味です。私たちはかたちではなく、物のいのちを生かそうとするのです。

句作に推敲ということは不必要ですか。

否、否。推敲（言葉の置き方を考える事）は大いに必要です。私たちは古い意味での推敲――即ち五七五というような一定の型を置いて、その中に如何にはめ込むべきかというような形の上の推敲、即ち技巧はこれを排斥しますが、自然の命を生き生きと捉えるために言葉を活かすということ（即ちリズムのための推敲）は、大いに苦心をするのです。

ただ、口に上がったままの言葉を漫然と投げ出したものが、すぐ俳句になるものではありません。不用意に言い出した不完全な句は、自分の一人合点になって、他の人の心に響く力がありません。また、そういう句はやがて自分の心にもあきられるものです。こんな初めから永久性もなく一般性もないものは何の価値もありません。

感じ及び言葉ということを真面目に考えてみたならば、自分の感じを真にまざまざと現すにはたった一つの言葉しかない、ということが解りましょう。その言葉を選び出さなければならないのです。「こうも云える」「ああも云える」というほうに動くのではまだ本当の根を得ていない証拠です。

そのような一つ一つの言葉よりも言葉続きは更に大切です。この言葉続きの上に、生きた心のゆらぎが現れるのです。これを私たちはリズムと称えるのです。

山彦してをれば暮れてゆく山　　朱燁洞

山彦が聞こえる、また、山彦が聞こえる、そして静かに、しかもずんずんと暗くなってゆく日暮れの山の淋しさが、この言葉続きの上に、いかにも鮮やかに現れているではありませ

んか。「しておれば」という言葉は、よく働いていて時間の移る感じを鮮やかに出しています。また下に「暮れゆく山」の「山」を置いたので、どっしりと重々しく山の感じが自分の心を包むように大きく落ち着いて出ています。上の「山彦して」の中に含まれている「山」という観念にも朦朧として一層この感じが強い、こういう風な言葉づづきの上から起こる響きはいわゆる、言葉の「調子」とは違うので、即ちリズムであります。

句にはリズムがなければならない、リズムがなければ散文になります。リズムさえあれば、外見はいかに散文的でも、それは立派に詩といわれます。この「山彦」の原句を――「山彦もきこえて峠くれにけり」という風にすると、五七五調の調子は出ますが、この作者が自然から受けた感じそのままのゆらぎは出なくなります。

つまり、リズムとは心のゆらぎをそのままに生かして言葉に伝えたもので、心象的動律とでも云うべきでしょう。私たちの俳句はこのリズムで生きるのです。そうして五七五というような一定の型を破らなければ、このリズムを生かすことができません。

俳句に季題はなくとも差支えありませんか。

前に挙げた二つの句とも、いわゆる季題がないので不審に思われたのでしょう。いやしくも俳句には四季の題材、即ち春は「霞」「燕」、夏は「雷」「撫子」などという季題を決めて、それを詠むということは十七字という形式と同じに長い間の因襲で、これを疑う余地のないもののように考えられていますが、これは全く一つの約束に過ぎないのです。

俳句の歴史をいえば、やはり連歌時代から「ただこうするもの」と定めた、その定めに何の批評も下さずに、守っているだけの事なのです。もう一つは、俳句を趣味的に作る人が外在的に、趣味のある事物を眺めて、それを詠おうとする態度から、四季折々の景物即ち季題というものを定めることになっているのです。これは上にも話したように、遊戯的な心持ちから来ているので、一体、遊戯をするのには、一定の運動場の垣根が必要であると同じく、自然界の中に勝手に縄を張って、ここが句作の場所だとその区域を画したものに過ぎないのです。

まじめに真実を求めるために句作するという心持ちからすれば、自分の心に映った自然の姿に生命を見出す事ですから、四季の季題でなければ句にならない、というのは不合理千万な話です。

右に挙げた句にしても、いわゆる季題はありませんが、自然の真実はしみじみと映っていましょう。ところが、これを試しに古い俳人たちに批評させたらこんな事を云うでしょう。

――「微風の梢に来て鳴ける鳥のその言葉」では、季節が解らない。「微風」を「春風」といったら春の心が出て面白い。またこの鳥は何の鳥が解らない、「鵯」ならば「鵯」といったなら、それとして秋の心持ちが出てよかろう、とか云うでしょう。古い俳人は何でも、四季という趣味の標準を以て物を見るのです。

ところが実際、私たちが自然に物を見る時、いちいち春夏秋冬の観念をもって見ているものではありません。ただ青い空や、微風に動く木の枝に心が触れることがあります。その心持ちを詠う時に、ことさらに春の感じとか秋の感じとかを云い出すのは、自分の感じに正直なのではなくて、何はともあれ四季の趣味ということを詠おうするやり方に支配されるので

す。もちろん、自然に、春の感じを詠います、決して「四季の感じを詠うべからず」というのではありません。私たちの主張するのは、何でもかんでも四季の色づけをしてしまうのはいけない、「四季の感じ以外を詠うべからず」とするのはいけないと云うのです。

なお「微風」の句で、作者が何の鳥かその鳥の名を知らなくとも、こうした感じに打たれることは可能です。また鳥の名を知っていても、その感じを写すために、鳥の名を出す必要はありません。同様に――「山彦してをればくれてゆく山」の句を試しに古い俳人に批評させたならば。やはり何の季節か解らない、「俤して暮れてゆくなり秋の山」とでも云ったらよかろう、と考えるでしょう。けれども、作者はこの場合、秋とか春とか、そういう季節について感じたのではなく、暮方の山、その山の中に声をあげている人間、その人間の声に山が応えているような心持ち、それだけの心持ちを表そうとしたのですから、「秋の」というような感じを置くことは明らかに蛇足になります。

要するに、私たちが自然から受け取った感じをそのまま傷つけずに生かして現すという事が大切なのですが、万事季題を通じて物を見るという習慣は、いわば四季という色眼鏡を通じて自然を覗かせるという事になる、そこがいけないのです。

俳句の要諦は句作の路一つですか。

そうです、この話の初めに、自分の外に向って俳句の体というものを研究しても、俳句の大義は解らない、自分の中に俳句の用を知ってこそ、真に俳句の妙味を悟ることができる、

と申したのはこの意味です。つまり、句作の路を貫く、句作で押し通す所に、井戸を掘って掘り抜いて、初めて清い泉が湧き出てくるような喜びを感じうるのです。

路傍の清水を探れるような軽い心持ちでは、例え一時の乾きを癒す位の慰みはあろうとも、一生の自分の命の養いとなるべき価値あるものを自分の有とすることはできない。言うまでもなく、この意味で句作するという事は、ただ句を作る為ではない。深く深く自然を見るために句作するのです。更に進んで、真実に触れた生活をするために、その証券として句作するのです。

結局、佳い句を作るという事は、いい生き方をすることだ、と言えます。自分の生き方がそのまま句に映って、それで真実味が深い、というような境地に達してこそ、ほんとうに立派なのです。

そうして、その修業は、自然に対する見方、また自分の生き方というものを句に焼き付けてみて、あたかも自分の心を鏡にうつすようにして、絶えず反省し又鞭撻するのが好いのです。重ね重ねも慎むべき事は、句作のための句作になってはならない事です。自分の真実な生活の反映として句作するという心持ちが肝要です。それには自分が真剣になって句作すると共に、その作を信頼すべき人に見てもらわなければなりません。

自分は真実を捉えたつもりでいても、実は存外浅薄な事実感に過ぎない、という場合はよくあります。ここの所を誤ると一人よがりになってしまいます。禅で言えば、いわゆる野狐禅で、ほんとうに悟るという機会に逢わなくなりましょう。もちろん、自分の句に対しては、相当な自信をもっていなければなりませんが、それと共に、他から教えられるという謙虚な心を持っていなければ、深く深く真実に向って勇猛精進する事はできません。

自分の句を他の人に見せて教えを受ける路は、俳句界では昔から「選」という形式で行われていますが、この「選」という事は自分の作の中に真実味がこもっているかどうか、即ち普遍性及び永久性をもっているものがあるか、どうかを鑑査してもらう事です。

ある時は自分の会心の作が認められることもありましょう、又、自分の自信ある句が選に漏れる事もありましょう、後の場合には自分は真実を捉えたつもりでいたが、それは真実の幻影に過ぎなかったかどうかを研究したり、又、真実に触れてはいても表現の言葉が不用意であったがために、即ち推敲が足りなかったために生きたリズムが出なかったという訳で、普遍性を欠いてしまったというような点を、よくよく研究してみるのがよいのです。

子規以後……詩としての俳句

「俳句小史」より
大正八年九月十日発行
荻原井泉水述

明治になってからも、やはり天保時代の句風のイヤミのある俳句が流行していて、俳句といえばこの他になかったのですから、子規も初めはこの風の句を作っていたのでしたが、ある宗匠の系統的の弟子ではなく、個人として自由に研究する位置にあった子規は、間もなく次の如く叫ばざるを得なくなったのです――先ず俳句は一つの文学でなければならない、古い宗匠達の句は謎だ、地口だ、理屈だ、もしくは教訓の代わりにしたものだ、これらは断じて文学というべきものではない、自分は文学的の俳句を主張する――と。（発句という名の代わりに俳句という名を用いたのもこの頃です。）

こういう立脚地から、子規は自分たちの句を新派と称し、古い宗匠たちの俳句をツキナミ（彼らは月並句会を開いて一種の賭博のような懸賞をやっていたから）という名のもとに排斥したのです。

新派という名に対し、しぜん、旧派という名もできたのですが、旧派の人たちは言論の上では到底子規一派に敵いませんが、元来、低級の趣味の人は畢竟低級の趣味を喜ぶものですから、こうした旧い連中が撲滅される訳はなく、今日なお地方にはなかなかはびこっているのであります。

さて、子規は研究のために、古来の俳句全部を題に依って分類して見ようという事を企て、貞徳風時代からの句を時代順に調べていく内に、元禄の芭蕉に至って燦然として輝いている作品を見い出した。それは所謂月並宗匠達が有難がっている理屈めいたものではなくて、自然そのままの大きな姿が出ているものでした。――「あら海は佐渡によこたふ天の川」、「猪も共に吹かるる野分かな」、これだ、これあってこそ芭蕉が偉いのだ、芭蕉が俳句の宗祖であ

るという訳はこれだ、世間の宗匠達がいう謎のような句は却って芭蕉を汚すものだ――という事を、子規は知ったのでした。

それから、子規はまた、時代を追って俳句の分類をして行くうちに、蕪村の句を発見した時は更に驚いたのです。――「指南車を胡地に引去る霞かな」、「虹を吐いて闇かんとする牡丹かな」、これ等の蕪村の句は芭蕉以上である、同じく大きな自然を見ている点で正しい道を進んでいる上に、趣向の複雑と言語の練達とに於いて芭蕉より勝っている――と子規は思ったのです。

そうして最も子規を驚かした事は、芭蕉の句には二つの道（子規はこれを佳句と悪句との二つの流れと見た）があるのに、蕪村はたった一つの道（私の云う自然の道）のみを闊歩している事です。芭蕉には随分佳句もあるが、その代わり随分悪い句がある。蕪村はその句集全部がいい、実に偉いものだと子規は感じたのです。

そこで子規は説明をつけて、芭蕉の悪い句は主観的の句だ、蕪村の句は皆客観的に作ってあるからいい、月並宗匠達の句も物を主観的に見る所がいけないのだ、すべて句は客観的に作るべきものである、とこう言い出した。客観的に作るとは、即ち写生である。物をあるがままに写生すればいいのである、と言い出したのです。

雉急に梅ことごとく斜なり
汽車過ぎて烟うづまく若葉かな
垣食ふや道灌山の婆が茶屋
冬枯や巡査に吠ゆる里の犬

子規が写生主義の句というものはこういうものです。これに依って新派の旗幟を明らかにしたのです。子規は中年以後不治の病のために病床を離れる事ができませんでしたが、日本新聞社の社員であった所から、新聞に依ってその主張を普及せしめたのです。新聞や郵便に寄る投書などという事は、元禄や天明には見ることのできない、明治に至っての新機関で、普及の上には大きな便利なものでありますから、子規の所謂新派は（旧派の人々からは新聞俳句などと悪口を言われつつも）大きな勢力となって、子規は明治三十五年に死んだのです。

さて、子規の俳風というものを見るに、之は一種の復興運動であったので、即ち、月並風に堕落していた俳句を、芭蕉・蕪村の正しい昔に復帰せしめたという事です。子規が自ら新派とは称するものの、子規の句と蕪村の句と比較して格別新しい見方という程の事はないのであります。

元禄の句と比べて天明の句が新しく進んだだけの比例を持って、天明の句より明治の句が新しく進んだという事の言い得るのは、明治四十一年頃初めて唱道された新傾向なるものです。これは子規没後、その門下の人に依って興されたのです。

雲を叱る神あらん冬日夕磨ぎに　碧梧桐
藪の音と月明り布団展ぶる時　同

子規は客観主義一点張りでありましたが、新傾向の句には一脈の主観味が加えられてあります。そもそも俳句を客観のみでゆけば安価なスケッチになります、句に潤いと深みを持たせるものは作者の主観より外にない、しかも子規は月並俳句の臭味を矯正するという立場から、余りに極端に客観主義を唱道し過ぎたのです。この反動が起こるのは当然であります。

また、季題の取り扱い方も、子規は主に芭蕉以来の手法たる配合体（題とある物との調和を見る）をとったのですが、新傾向では配合というような継合せでなく、事象を包む空気を出そうとしている。

また、十七字の形も子規の時分には、字余りと称して、稀に長い句法があったのですが、新傾向では十九字を普通にしました。即ち、短歌以来の五七五の因襲を離れて俳句は俳句としての新しい型を作ろうとしたのです。

しかし、新傾向の句は、俳句としては余りにゴタゴタと詰め込んで窮屈だという風にも見えます。これに対して子規門下の他の人々は、俳句は「平明なるべきものである」という事を主張し、どこまでも子規の唱えた平板な写生主義を失うまいとしたのです。

秋雨にくさる鶏頭の梢かな　　虚子

ところで、私から見ると、いまさら、子規のままに等云うのは宗匠風な伝統に囚われた考えで何の生命もなり、しかし、新傾向も不徹底である。季題というものを自由に取扱うのは

よいが、一歩進めて言えば、季題などを守っている必要はない、季題は連歌以来の遺物である。従来、これが棄てられなかったのは、想念の道と分かれて自然の道を誤らないようにとの目標に過ぎない。自然というものにさえ深く踏み入って行けば、季題などに束縛されている理由はない――また、字数の問題も、もっと自由に徹底すべきである。ただしそれが短歌とならないように、また散文とならないように、俳句のリズムをとらなければならない。このリズム（これを私は印象律と云う）さえとっていれば、字数は全く型を離れても俳句として立派に成立する――こういう事を私は主張したのです。それは明治も過ぎて大正と改まった頃でした。

力一杯に鳴く鶏と泣く子との朝　　井泉水

これに対して、子規の伝統を以て任じている人々は、「これは俳句ではない、俳句はどこまでも十七字でなければならない、また、季題がなければならない」というのです。

しかし、こういう非難の浅薄である事は、この「俳句小史」の初めからの話で私は言い尽くしています。即ち、第一に、名称という点に拘泥するには当たらない、名よりも実である。「俳句」の「俳」の字に拘泥するならば貞徳風の洒落や地口の句こそ本当の俳句と言うべきではないか。俳句であるか、ないかという事より、私たちにとって価値があるかないかという問題で決めなければならない。

子規は文学としての俳句という事を主張したが、私は更に進んで詩としての俳句を主張するのです。季題という取材の範囲の制限を置いて作るのでは一つの遊戯になってしまう。自分の心の内からの感激を表現すればこそ詩である。（その感激が自然に焦点をもてばこそ、またその表現が印象律的になればこそ俳句である。）この場合に季題などと云う外的な約束にしばられる訳はない。もしそんな風に約束的に妥協をすれば、詩というべき物ではなくなってしまうのです。

第二に、俳句の起源で話した通り、俳句は和歌に源を発したので、完全に和歌の行き方から離れて、詩として独立するようになってこそ、完全なる俳句というべきです。五七五の如きは和歌の音楽的旋律の遺物であり、且つ音楽的としては不完全な遺物です。

季題は素より和歌の遺物、それも平安朝時代の、和歌を以て遊戯とした時代の遺物です。こういう和歌的な古い因襲をすっかり去ってこそ、本当の俳句が出生するのです。

このことを明らかにするために、私は「俳句の起源」、「俳句の革新」に於いて述べて来たのであります。

で、私は俳句という歴史に於いては、芭蕉まで帰って、そこから芭蕉の精神を以て新たに出発するのです。子規は芭蕉より蕪村を挙げました、なるほど俳句としての技巧の上からは蕪村は確かに芭蕉より上でしょう。

しかし、私は技巧よりも俳句に向かう精神を尊びます。自分の真実を自然の中に見出して行く、あの敬虔な全人的な芭蕉の心持ち、それこそ詩としての俳句の産まれ出るべき心持ち

です。

砧打つて我にきかせよや坊が妻　芭蕉
年くれぬ笠着て草鞋はきながら　同

芭蕉の淋しい姿が目の前に見えるではありませんか。蕪村の句は、

伊勢武者の鐙にとまる胡蝶かな　蕪村
蘭夕べ狐のくれし奇楠を炷かん　同

どこにも作者の姿は見えません、こしらえたものです、上手に作っただけのものです。私は言います、芭蕉は本当の詩人です、蕪村は画家です。それは自然を単に客観的に描写したという意味でです。しかし、実際蕪村は南画の画家として有名でもあったのです。

そうして、子規は事業家です、それは月並を排撃して見事に新派の天下を開拓したという意味です。実際子規の俳句には作品として芭蕉や蕪村に匹敵する程のものはありません。
で、私は信じます。詩として俳句を生かすには芭蕉に帰らなければならない、しかし芭蕉の俳句に帰るのではなく、芭蕉の精神へ帰るのです。談林を破って正風を築いたその意気へ帰るのです。

私が詩としての新しい俳句を主唱して以来、もう七年は経ちました。当時の新傾向を主張した人々は、今日では又句風が変わっていますが、それはいたずらに外部に向って新しみと変化とを追うという風で、かの「談林一派の行き方」に類似しています。

子規直系という人々の句は、子規時代のままに少しの変化もありませんが、いたずらに旧を守る退嬰的な態度が「貞徳一派」と類似しています。その中でも客観のみに飽き足らずして、少しく主観味を交えた人は、子規が排斥した月並一派に近い趣味の所を停徊しています。

そうして私は私として、自分の進む道が「ただ一つの正しい道」である事を信じて進んでいます。この三つの派がちょうど上に話した貞享時代の三派鼎立にも似ていましょう。果して何れが俳句の将来の道を開くものであるか、――諸君の推断に任せるところであります。